

深谷昌志著

『子どもから大人になれない日本人——社会秩序の破壊と大人の消失』

(リヨン社 2005年3月)

松澤員子 (神戸女学院)

本書の著者は、子どもに関するテーマを研究する人なら、その専門分野を問わず、誰もがいくつかの著書を知らない人はないと断言できるほどに、著名な子ども研究者であり、当学会の前会長でもある。専門分野を異にする私がこの書評をお受けしたのも、これまでに数多くの著書から子ども研究へのさまざまな問題提起をいただいていたからである。

さて、本書は、歴史社会学的視点からの子ども研究の成果も数多く出版されてきた著者が、子どもと大人の関係に視点をおいて、日本の近代化から現代化に至る過程で子どもが大人になる社会的装置がどのようにして崩壊してきたのかを明らかにし、大人世代のこれからの生き方について提言を試みたものである。歴史的な資料や民俗的な資料に加えて、著者自らの育ちの環境や生活体験、国内外における社会学的な調査結果の分析など、豊富な実証的資料を用いて論述されている。著者自らが序文で「エッセイ風にまとめたかった」と記しているように、文章も平易で読みやすい。大学生のみならず、教育の現場で、また地域社会でなんらかの形で子どもに関する仕事をされている人には、ぜひ読んでいただきたい好書である。現代の日本社会が背負っているさまざまな子どもと大人の問題を考える人にとって、問題の背景とそれを解きほぐすヒントを与えてくれるに違いないと考えるからである。

ここで本書の構成と内容を概観する前に、本書の中心的な概念である「大人」について著者の考え方をまとめておきたい(第三章、206-209頁)。著者は、大人の条件を「子どもっぽい」という言葉のもつ意味に対応させて「大人っぽい」が意味する領域を考察する。肯定的な意味では善悪の基準をもつ、見識をもつ、懐が深い、人情味がある人であり、否定的には腹黒い、権力的な姿勢、邪魔物的な存在が挙げられている。全体として、社会的な見識を持ち、しっかりした判断を下せ、人情味もある良識人という意味に用いられている。

本書は三章から構成されている。第一章は教育史的観点から3つの時代に分けて、子どもが一人前の大人に成長する過程がさまざまなデータをを用いて記述されている。まず、小学校教育が普及してゆく明治・大正時代の職人社会・農民社会、そして女子の大人への成長の過程、次に学歴が出世を左右する時代に受験勉強という試練を乗り越えなければならなかった時代、最後に少子化に伴って受験というハードルが低くなり、学習意欲の著しい低下が見られる現代社会の子どもたち、それはフリーターやNEETを生み出している時代でもある。著者は子どもから大人への移行に通過しなければならない段階として「禁欲的な厳しい修業」期間の存在を最も重視する。しかし、現在は「子ども—漂流—修業—大人」という4段階を踏むようであるが、修業という感覚をもたない若者の問題が指摘されている。

第二章は現代の家庭の中で親子としての子どもと大人の関係性が分析される。先ず、著者自らが行った欧米社会やアジア諸国でのアンケートや聞き取り調査の結果と日本での調査結

果を比較しながら、子育ての日本の特性がさまざまな角度から検討されている。続いて、昔の子どもが家を離れ修業の時期を過ごした年代にあたる現在の中学生や高校生とその親たちへの調査の結果にもとづいて親子関係を分析し、親離れ・子離れできない現在の親子関係を明らかにする。そして、この章の終わりには、中学生に自立心を促すための方策6つが親にむけて提言されている。

第三章「子どもと大人の未来像」では、現代の子どもの育ちの環境の諸問題を事例をもちいて総括しながら、子どもを大人に育てる新たな装置についていくつかの提言がなされている。特に、ここでは子どもの生活を支える「遊ぶ、学ぶ、働く」という三領域を、それぞれに費やす時間で三角形に図示し、働くことに多くの時間を費やした明治・大正期の子ども、遊ぶ時間の多かった昭和初期・30年代、学ぶことに時間をかけた昭和40年代、電子メディアに囲まれてひきこもる子ども類型が明示される。ここで著者の理想の子ども像として地域で群れ遊ぶ子どもを想起しながら、現代の子どもにはある程度の働く体験も学習意欲も必要であるが、なにより地域で群れ遊ぶことの重要性を強調する。そして、週に2・3日子どもの自由時間を保証する「フリーデイ」と安心して遊べる「サンクチュアリー（聖域）」を設定すべきと提言する。最後に、著者は大人を育てる伝統的な装置が崩壊した現代日本社会で、目指すべきは個々人が意欲的に自分の生き方を探りながら、柔軟なネットワークで結ばれる市民型の社会ではないかと述べて、大人世代の生き方への提言で本書は締めくくられている。しかし、この最後の提言の部分だけは、それまでの論調とは異なり、まとめを急がれたのではないかと考えるのは評者の読みが足りないのだろうか。

最後に、かつてアジア諸国、殊に台湾を中心に子どもの生活文化に関心を寄せ、フィールドワークを行っていたので、本書の著者が提言する「子どもの群れ遊び」の復権について考えてみたい。子どもの育ちの過程で群れ遊び体験の重要性が研究者によって指摘されて久しい。そして、日本でも研究者自らの発案によって、また地方行政機関に協力して遊びの施設を設けたり、学校教育でもゆとりの時間が取り入れられるなど、さまざまな試みがなされてきた。それにもかかわらず、群れ遊ぶ子どもの姿は消えてゆく。子どもの群遊びには仲間も、場所も、そして自由な時間も必要条件であることは指摘されてきた。しかし、評者はこれまでの調査から、子どもたちの背後に信頼し、支え合う大人の人間関係が成立していることが重要であると考えている。最近、子どもの命が奪われる事件が日常的に起きている。これも大人社会の人間関係が希薄になっている現代社会の歪みではないだろうか？ともあれ、多くの事実を学びながら、興味深くこの書物を読み終えることができたことを感謝したい。